

フォーラム・セミナー報告

第15回
関西大学FDフォーラムを開催しました

2016年8月8日（月）に、関西大学千里山キャンパスで第15回関西大学FDフォーラム「大学入試改革を考えるー高大接続の観点からー」を開催しました。

講師として、大阪大学高等教育・入試研究開発センターセンター長で文部科学省中央教育審議会大学分科会等の委員も務められる川嶋天津夫先生をお迎えし、高大接続に関するホットトピックである大学入試改革について、これまでの議論、さらにはこれからの展開についてご講演いただき、その後、フロアからの質問にパネルディスカッション形式でお答えいただきながら、単なる選抜機能システムの変更ではない、小学校から大学までの一体化改

革の全体像について情報提供いただきました。当日は暑い最中、43名の外部参加をいただき、フォーラム内も熱い議論に湧きました。

事後アンケートでは参加者からは「その意義が明快になった」「不安が払しょくされた」などのご意見をいただき、大学のみならず、教育内容や方法の接続といった真の高大接続という新たな領域に、今後、関西大学教育推進部も一歩を踏み出した時間でした。

（教育推進部 森朋子）

日時：8月8日（月）14：00～16：00
場所：第2学舎1号館5階A503教室



当日の様子

英語開講科目(EMI)の
教育実践(CLIL)に関するグローバルFDを開催

2016年7月9日（土）に、関西大学千里山キャンパスにて、英語で専門科目の授業を行う教授法・授業実践に関する「グローバルFD (Faculty Development)」を開催しました。本学では2014年度から共通教養科目の一部として全学共通の英語開講科目（EMIカリキュラム）を開始しており、2016年度にはそれらをグローバル科目として改編・充実し、年間80超の科目を提供しています。その担当者および今後英語での授業を実施することに関心を持つ教員らが参加し、今回のFDを開催しました。担い手は、2016年10月より本格的に始動した「国際教育支援室」に所属する特別任用教員（Dr. Mark Ombrello, Dr. Gavan Gray, Dr. Oliver Belarga）の3名です。日本人

学生と多様な国からやって来た留学生が混在するクラスを、どのように教えることで、効果的な情報伝達、活発な学習を促すことができるのか。語学力の差、文化の差といった様々な要因を乗り越えなければ、日本の大学におけるEMIの意義は薄れてしまいます。今回のFDは2部構成で実施しました。第1部では3名の特任教員によるCLIL（内容言語統一学習）メソッド等を応用し、①学生の理解の段階に合わせた段階別タスクの構築の仕方、②使うことで学生が講義をより容易に理解できる英語表現、③語学能力の差を活用したペアワークなど、様々な授業実践のヒントを参加者らに紹介しました。第2部では、国際教育支援室が担当し、現在課外活動の一環として提供しているMi-Room（マルチリンガル・イマージョンルーム）とEMI科目の上手な連携の仕方や、通常日本語で開講している学期授業の一部だけを英語での活動として転じることができるCOIL（オンライン国際交流学

日時：7月9日（土）13：30～16：30
場所：千里山キャンパス国際教育支援室

習）の紹介、そして実際の授業事例などを共有しました。参加した教員ら自身は多様な専門分野の講義を担当しているため、FDの最後では大変活発な質疑応答の時間を設けることができました。「大講義場面でも活発な授業や理解を促す工夫はどうすればいいのか?」「グループワークなどの評価をどのように行えば、最終成績に反映できるのか」といった自身の日々の担当科目を鑑みた現実的な質問や、「日本人学生の語学力が妨げになり、肝心の専門内容が不十分な理解となるのではないか」といった、EMIならではの不安や疑問点についても意見交換を行いました。すべての疑問を解決する「答え」を支援室が一方的に与えることができるのではなく、本学で実際に学生と日々接する教員たちが、国際教育支援室を拠点として共に「関大らしい国際教育実践のあり方」を考える。そんな一場面を、今回のFDで垣間見ることができました。今後も継続してグローバルFDを開催していく所存です。

（国際部 池田佳子）



2016年7月9日FD担当者3名の講義場面



FDワークショップに聞き入る参加者ら（本学教員）

第22回
ランチョンセミナーを開催しました

2016年度第一弾となる本セミナーでは、「知って得するループリック活用術～ループリック評価を体験しよう～」と題し、学習成果を可視化する評価ツールとして注目されている、ループリック評価に関するミニレクチャーと体験ワークを実施しました。体験ワークでは、実際の初年次科目におけるグループ発表動画を用いたループリック評価の模擬体験を行い、その後、教育開発支援センターが提供する「KUループリック」への入手方法と利用方法をご紹介しました。

参加者からは「自分の評価の仕方の見直しになった」「ループリック評価の構築方法が理解できた」という声だけでなく、「先生方が感じておられる成績評価に対する難しさ・問題を知ることができた」「実

際に議論することで改善点などに気づきが得られた」というご意見も多く寄せられ、授業評価に関する課題を参加者同士で共有していただく機会となりました。

現在、CTLでは、教職員・学生のみならずループリック評価をより身近に感じていただくため、「ループリックの使い方ガイド（教員向け／学生向け）」を作成しております（近日中に公開予定）。ご興味を持たれた方はお気軽にお問い合わせください。

※本セミナーの一部は「関西大学講義収録・配信システム（学内閲覧）」にて配信予定です。

（教育推進部 千葉美保子）



当日の様子

第13回日常的FD懇話会
「どのようなレポート課題を提示すると
剽窃が減るのか？」

2016年11月18日に第13回日常的FD懇話会を実施いたしました。講師に京都光華女子大学短期大学部成瀬尚志先生をお招きして「ループリック評価とレポート

課題の提示方法」というテーマについてお話いただきました。

成瀬先生は「剽窃が困難となるレポートの論題にはどのようなものがあるのか？」

について研究をすすめておられます。講演では、以下のような学生のレポートに対する課題、また望ましい論題の作り方について具体的な話を伺いました。

日時：11月18日（金）16：30～18：00
場所：第2学舎3号館1階D102教室

★学生がレポートで陥りやすい問題点

「…についてまとめなさい、説明しなさい」といった論題の場合、学習者が内容に関してどこまで深めるべきなのかに関して自分でレベル設定をできず、結果として剽窃が起こってしまうことが提示されました。また「論証型レポート」の場合は、求められることが複数あり、抽象度が高いため、学生自身が何を書けばよいのかに関して理解できていない可能性が高いことが紹介されました。学生自身がレポートの目標を理解して、目標を達成できているのかを自分自身で判断するためには、学生が創意工夫をする必要性がある課題として提示することが求められ、以下のようなレポート課題が提示されました。

★学生が創意工夫をするレポート課題

「リバタリアニズムとはどのような立場か、重要なポイントを3つ抜きだし、なぜその3つが重要であるのかについて説明しなさい」

「リバタリアニズムの問題点について、文献を調べて論じなさい、その際、どのような文献を調べたのかについて出典を明記し、どの資料が重要でどの資料が重要でなかったのかについても説明しなさい」

「次の課題文を読み、課題文の説明が倫理学上のどの立場からのものかについて説明しなさい、その際なぜその立場からの説明になっているといえるのかについても論じること」

「正義とは何か。授業を受けたことで、あなたの理解がどう変わったのかを説明しながら論じなさい」

「〇〇について論ぜよ。その際、2名以上に読んでもらい、そのコメントを記載し、コメントに対する返答も書きなさい」

その後、参加者の先生方には実際にレポート論題を考えるワークに参加していただきました。詳細に関しては12月上旬に

刊行される成瀬尚志編『学生を思考にいざなうレポート課題』（ひつじ書房）をご参照ください。CTLに配架する予定です！

（教育推進部 岩崎千晶）